

チュールリップ 新聞 第2号

交錯する感情の渦



波乱を予感させる人間関係を描いている「true tears」。その物語は、5話から大きく動き始める。物語の核となるのは、言うまでもなく眞一郎だ。乃絵と愛子から慕われる彼をうらやましく思う視聴者は少なくないだろう。しかし学生時代の自分を振り返ってみると、高校二年の頃は自分のことだけで精一杯で、実はこの状況がとても手に負えるものではないと気づく。チャホヤされるだけならまだしも、本気の思いは受け取る方もそれなりの覚悟を求めるからだ。それに眞一郎が思いを寄せているのは、乃絵でも愛子でもなく比呂美だ。しかし比呂美と眞一郎が兄妹かも知れないという疑惑が発覚してからは、比呂美とともに眞一郎も混乱してしまっている。

その比呂美は、眞一郎のことを憎からず思う一方で、自分と兄妹かも知れない彼と距離を置くべきではないかと苦悩している。いつそ兄妹疑惑を乗り越えるほどに比呂美の思いが強ければ、とも思うのだが……。そんな比呂美と対極に位置するのが愛子だ。彼女は迷ったすえ、自分の気持ちを眞一郎に伝える道を選んだ。彼女に反発を覚える人は多いと思うが、その一方で、眞一郎への思いを買おうとする愛子の一途をうらやましく思う人もいるのではないだろうか。眞一郎や比呂美に彼女のようなひたむきさがあれば、この作品はすいぶん違った展開を見せたことだろう。



惑の発覚によってがんじがらめになっているし、眞一郎、愛子、三代吉の関係は、愛子の突然の行動のために一波乱ありそうな雰囲気漂っている。そんな中で、ドロドロした人間関係と無縁でいるのは乃絵だ。眞一郎の迷いも、比呂美の苦悩も、純の思惑にも無関係に彼女は眞一郎を慕っている。それは愛子のように他者を傷つけかねない激しいものではなく、幼子のように無垢で素直な気持ちの発露だ。しかし、無垢なものほど壊れやすいものはない。眞一郎を取り巻く錯綜した感情の渦に、乃絵が巻き込まれないとも限らない。その渦に巻き込まれて傷つき、無垢ではいられなくなった時、乃絵は一体どう変わっていくのだろうか？

(文：田辺心太)